

ひとつの火

新美南吉

青空文庫

わたしが子どもだったじぶん、わたしの家は、山のふもとの小さな村にありました。

わたしの家では、ちようちんやろうそくを売っておりました。ある晩^{ばん}のこと、ひとりのうしかいが、わたしの家でちようちんとうろそくを買いました。

「ぼうや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」
と、うしかいがわたしにいました。

わたしはまだマツチをすったことがありますでした。

そこで、おっかなびつくり、マツチの棒^{ぼう}のはしの方をもつてすりました。すると、棒のさきに青い火がとりました。

わたしはその火をろうそくにうつしてやりました。

「や、ありがとう。」

といって、うしかいは、火のともったちようちんを牛のよこはらのところにつるして、いってしまいました。

わたしはひとりになってから考えました。

——わたしのともしてやった火はどこまでゆくだろう。

あのうしかいは山の向こうの人だから、あの火も山をこえてゆくだろう。

山の中で、あのうしかいは、べつの村にゆくもうひとりの旅たび人びにゆきあうかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちよつとかしてください。」

といつて、うしかいの火をかりて、じぶんのちようちんにうつすだろう。

そしてこの旅人は、よつびて山道をおいてゆくだろう。

すると、この旅人は、たいこやかねをもったおおぜいのひとびとにあうかもしれない。

その人たちは、

「わたしたちの村のひとりの子どもが、狐きつねにばかされて村にかえつてきません。それでわたしたちはさがしているのです。すみませんが、ちよつとちようちんの火をかしてください。」

といつて、旅人から火をかり、みんなのちようちんにつけるだろ

う。長いちようちんやまるいちようちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねやたいこをならして、やまや谷をさがしてゆくだろう。

わたしはいまでも、あのとときわたしがうしかいのちようちんに
ともしてやった火が、つぎからつぎへうつされて、どこかにとも
っているのではないか、とおもいます。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひとつの火

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>